

原民喜「小さな村」と「氷花」における物語の行方

——『小説集 夏の花』の「後記」と題辭とにつながる思い——

大 高 知 児

〈キーワード〉 原民喜 小さな村 氷花

はじめに

本稿は、原民喜の『小説集 夏の花』（ごくろ文庫・一九四九年・能楽書林）に収録されている「小さな村」（一九四七年八月『文壇』）という小説における「飢えと業苦の修羅」という言葉に象徴される、一九四五年八月から翌一九四七年一月の間の広島県佐伯郡八幡村で「私」が遭遇した事象と「私」の思いとについて解析する。その上で、『小説集 夏の花』の「後記」にある「この書は稀有な体験の記念である。罹災直後、ひどい衰弱と飢餓の中で私はまず『夏の花』を書いたが、『廃墟から』はその翌年ひだるい軀を石油箱の机に鞭打ちながら書いた。その他の四篇（引用者注…「壊滅の序曲」・「小さな村」・「昔の店」・「氷花」）も上京後、赤貧と窮死に追詰めながら仕上げた。こういう滅茶苦茶の条件の中でのものを書けたということも、私としては稀有のことであった」という文言に込められた原民喜の思念と、「小さな村」の時空間とがどのように重なり合うのかという点について検討を加える。次に、「彼」という人物が語る「氷花」（一九四七年二月『文学会議』）という小説における「彼」の思考の展開と物語の収束の仕方とに注目し、それが『小説集 夏の花』の題辭（エピグラフ）である「わが愛する者よ請ふ急ぎはしれ／香はしき山々の上にありて獐の／ごとく小鹿のごとくあれ」とどのように結びつくのかという点について考察する。

一 「小さな村」の中の「ひだるい」時空間

(1) 八幡村という場所

原民喜が書き留めた「原爆被災時のノート」や、随筆「星のわななき」・「原爆回想」などによれば、一九四五年八月六日に広島市熾町の長兄原信嗣宅で被爆した原民喜は、京橋川の堤にて長兄・妹の恭子・次兄の守夫とその家族らと共に一夜を明かし、七日は治療所のある東照宮の境内で野宿をして、八日の昼過ぎに長兄の傭った馬車で移動し、途中、遺体となった次兄の息子文彦との対面や長兄の息子茂との遭遇を経て、夕刻に八幡村に到着したという。このことは、小説「夏の花」において詳らかに描かれている。

この八幡村とは、広島県佐伯郡にあった八幡村のことで、同村は一九五五年に近隣の町村と合併して五日市町の一地区となり、一九八五年に五日市町が広島市に編入されて広島市佐伯区内の一地域となった。現在、当該地域において八幡という名称は、佐伯区八幡という行政町名や八幡川・八幡神社・八幡小学校・八幡公民館という形で残っている。

一九四六年四月の原民喜が長兄に宛てた書簡には「七時二十五分広島発の列車は大竹から、復員列車として変更されてあたので、大変な混み方でしたが、とにかく無事で東京へ参りました」とあり、一九四六年四月四日の深川恭子宛の書簡には「卅日に上京した。なかなか東京も良く焼かれてをるのに感心するが焼け残つてをるところもあり広島とは違ったものを感じることもたしかだ^①」とある。一九四六年当時、平常でも広島と東京の間を列車で二四時間前後を要することからも、遅くとも一九四六年三月二九日の午前「七時二十五分広島発」に相当する列車で出立し、翌三月三〇日に東京に到着したものと考えられる。つまり、原民喜が広島県佐伯郡八幡村に身を置いていた期間は、一九四五年八月八日から一九四六年三月二八日頃までのおよそ八ヶ月間ということになる。

その八ヶ月間の八幡村での原民喜のありようについて、『五日市町誌・下巻』において次のように紹介されている。

原民喜の疎開した八幡村は、五日市町の八幡である。八幡村大字中地一四〇七番地（現在は一四一〇番地）精米業を営んでいた田尾寿一（現在は精米業を長男尚が営む）の離れである家裏にあった二階を借りて疎開した。離れは総二階三方回り縁となつており、階下の八畳・四畳に兄一家が住み、二階の八畳・三畳に民喜が起居していた。現主人尚氏の語るところによれば、「民

喜は外出も極めてまれで、『よくもあのようにじっとして居られるものだ』と話合っていたという。正月元旦には羽織・袴の正装で、縁をつたってすぐ来られるはずなのに、わざわざ家の正面入口から年頭の挨拶にみえた。義理固い人だなあ感心して今に記憶している。」とのことであった。⁽²⁾

八幡村における原民喜の立ち居振る舞いが、自らの性格や嗜好に因るものか、自分が置かれている立場・境遇を弁えたものなのか、もしくは自身の肉体的・精神的状態がそうさせるのか、しかとは定めがたいが、身近にいる他者の眼には少々奇異に映っていたであろう。原民喜本人は、義弟の永井善次郎（佐々木基二）宛の書簡において、「八幡村といふのは廿日市から一里あまり奥へはいった寒村です。（略）僕達も一ヶ月あまりを半病人のやうに勢なく暮らして居ります。何せ食糧が足りないので無理ありません」（一九四五年九月一五日）、「毎日よく雨が降りつづくので困ります。ここは食糧事情が悪くて弱らされて居ります」（同年一〇月二日）、「僕も早く仕事に没頭できる環境が得たく（現在の住居では十人家族なので本を読むのも容易ではありません）心を悩まして居ります」（同年一〇月三日）、「生活も押つめられるので、今のうち就職でもして暮らさうかと思つたりそれとも一年間位はこの地を離れたところで、英気を養つておきたいとも思ふのですが、なかなか目鼻がつかず今年も虚しく八幡村で終わるのかと思ふと侘しいことです」（同年二月二八日）、「僕も正月以来早く八幡村を立ち去ろうと思ひ（略）光太の処に部屋があいてゐて置いてやつてもいいと云ふので早く上京しようと思ひます」（一九四六年二月五日）などとあるように、食糧難・不自由な生活・身の振り方もままならない状況などに苛まれている思いが示されており、こうした書簡からも為す術もなく「じっと」寓居に引き籠もらざるを得ない、八幡村での原民喜の姿が浮上してくる。なお、書簡には「十人家族」とあるが、八幡村の「人口調査」台帳（一九四五年二月二〇日時点）には、戸主「原守夫」・「男6女3計9」⁽³⁾と記されている。

ところで、原民喜が身を置いた当時の八幡村はどのような状態であつたのか。そもそも八幡村は農業を主たる生業としていた人々を中心に形成されていた村で、「昭和一七年発行の八幡村誌には『大都市広島二近ケレドモ商業地トシテノ我村ハ振ハズ商家五〇戸、内卸部二戸（個人一、会社一）、小売部四八戸（個人四七、会社一）ナリ、何レモ商業專業ナルモ規模小ニシテ望ヲ託スルニ足ラズ』と発展性のない状況を述べている」とあるように、広島市内に半年ほど身を置いていた（それまでは東京及びその近郊で生活していた）原民喜には、そこが「寒村」（『貧しくさびれた村』というように映つたのかも知れない。なお、『広島県戦災史』によれば、広島県内の空襲は、

一九四四―五年の間に四六回あったが、八幡村には軍事関連施設がなかったこともあり、空襲により直接被害を受けたという記録はない。⁽⁵⁾

また、広島に原爆が投下された一九四五年八月六日直後の八幡村については、爆心地からは約七・六キロメートルの地点にある「八幡村では、己斐峠を越えて殺到した避難者を国民学校に收容し、村民こそって救護にあたった。八幡公民館の野村慶一館長の報告によれば、四十三年八月に八幡村役場の罹災者收容名簿が発見され、六日午後一時から收容を開始し、合計一、三四二人に達している」という状況であった。この一三四二人という「避難者」の数は、一九四四年一月二六日時点調査の八幡村の人口二二四人という数と比較してみると、いかに大規模な人数であったかが分かる。前に触れた一九四五年一月二〇日時点調査の八幡村の人口は、原民喜の次兄一家のように、しばらく身を置かざるを得ない「避難者」が増加したためか三〇〇六人となっている。⁽⁷⁾なお、八幡国民学校の收容所は九月末日まで設けられ、その後、罹災者は統合收容所としての廿日市工業学校に收容されることになった。さらに、八幡村の医療体制も不十分で「八幡地区の医師は横山敏陽と坂井タマノの二人で八幡国民学校に收容された、約一三〇人を交代で診療した。看護は助産婦や婦人会の人たちが当り、給食は毎日がかぼちゃであった」という状態にあったのである。⁽⁸⁾

要するに、戦時下、被爆直後、終戦後、いずれの時期においても八幡村は、経済的にも社会的にも厳しい環境にあり、行政自体にも村民たちにも「避難者」に万全の対応をする余裕というものはなかったのである。

(2) 「小さな村」における一九四五年——「廃墟から」との相違

原民喜の『小説集 夏の花』所収の小説「夏の花」・「廃墟から」・「氷花」には、「八幡村」という地名が出てくる。また、同書には、ある「村」を舞台にした「小さな村」という小説も収録されている。「小さな村」では、「広島」・「大阪」・「東京都」という地名は出てくるものの、村名は明記されておらず、「村から一里半ばかり小川に添って行くと、海岸に出たところ」にある町も「H町」であり、「広島ゆきの電車」の最寄り駅は「R駅」となっている。ただし、物語の冒頭にある「青田の上の広い空が次第に光を喪っていた。村の入口らしいところで道は三つに岐れ、水の音がしているようであった。私たちを乗せた荷馬車は軒とすれすれに一すじの路へ這入って行った。(略)家並が杜切れてはまた続いていった。国民学校の門が見え、それから村役場の小さな建物があった」(岩波文庫

120頁」という描写について、前掲『五日市町誌・下巻』には「観音・八幡・河内・砂谷を経て、水内に通ずる都市化していない当時の八幡村内を通る旧県道辺りの風景が正確に描かれている」（297頁）と記されている。なお、同書には、時代別の「八幡地区」の復元地図が掲載されており、その「昭和10年頃」の地図には、各商店・工場と共に「小学校（国民学校）・「村役場」・「農会」などが表記されており、道路・河川・田畑の形状・位置関係からも、実際に作者・原民喜が身を置いた八幡村を舞台としていることは確かである。よって、小説「小さな村」における「村」に関わる物語を、広島市近郊の、ある農村として解することを前提にしつつも、実在した八幡村を念頭に置きながら、「H町」も廿日市町として、「R駅」も広島電鉄宮島線の楽々園駅をイメージして、八幡村に関する物語として読み進めていくこととする。

「小さな村」という小説は、「私」という人物が、「村」で遭遇した人々や見聞した事象、それに伴う感想が綴られている。「小さな村」は一五の掌編が連作風に構成されており、順にそれぞれ「夕暮」・「一老人」・「火葬」・「農会」・「玩具の配給」・「罹災者」・「脅迫」・「舌切雀」・「巨人」・「朽木橋」・「路」・「雲」・「路」・「深井氏」・「路」という題が付されている（以下、三編ある同題「路」については、便宜上、順に「①路」・「②路」・「③路」という形で表記する）。この中の最後の三編、「②路」・「深井氏」・「③路」を除く一二編が一九四五年時点の話である。

物語の基本的な展開は、一九四五年八月八日の夕刻、「荷馬車」に乗り、「罹災者の姿」となり、「次兄の一家族と、妹と私と、二昼夜の野宿のあけく、漸く辿りついた」ところから始まり（夕暮れ）、八月一日、広島で遭難して五日目に死んだ男の葬式に加わり（火葬）、終戦の八月一日の夜に牛を牽いていた爺さんが万歳と叫ぶ将校に斬りつけられるという話や八月中旬の宣撫用の玩具が配給され、小さな姪の目の色がやわらぎを帯びてくること（玩具の配給）や、九月の台風直後の様子や飢えに悩まされる「私」の思い（巨人）が語られる。その後、「ともかく何か喰べさせてもらえる」ので「H町」の「長兄の仮寓」へと向かう「一里半の路」を「ひだるい気持」や「人生のように侘し」といふ思いを抱きつつ幾度も行き来したこと（①路）が語られる。

物語では、その間に「私」が「村」で遭遇した人物——「深井氏」（夕暮・深井氏）、「村役場」の「老人」（一老人）、「農会の女事務員」（農会）、牛牽きの「爺さん」（玩具の配給）、「大阪の罹災親爺」で「祈禱師、田口の親爺さん」（罹災者・舌切雀）、「村長」（脅迫）——などの「村人」に関する挿話が織り込まれている。総じて「小さな村」という物語では、「村」の風物や実態そのものを描くというよりは——例えば、風景描写についても、「私」の空腹感や空虚感の表象となっている（舌切雀・巨人・①路・②路）——、それに付随して「私」が関わ

りをもった「村人」について語られていると言ってもよいだろう。

物語において、「村人」／「村」に対する「私」の思いが、端的に示されているのが「脅迫」という掌編である。「私がひどい下痢に悩まされ」ていた八月下旬から九月上旬にかけて、「国民学校の校舎が重傷者の収容所に充てられ、部落から毎日二名宛看護に出ることになっていた」のだが、次兄一家（物語では「森さん」と呼ばれている）は、様々な事情でそれを為し得ない状況にあり、来訪した「かなりの年配の男」に怒鳴られてしまう。そうしたこともあって「罹災者の弱味をもつ私たちは、その後は戦戦兢兢として、村人の顔色を窺わねばならなかった」ことになる。さらには、「嫂」や「妹」からもたらされる「村人」に関する否定的な話も「私」は耳にするのである。

私も、その村の人々をそれとなく観察し、できるだけ理解しようとはした。だが、私がその村に居たのは半歳あまりだったし、農民との接触も殆どなかったので、街で育った私には、何一つ掴むところがなかった。もともと、この村は、海岸の町へ出るに一里半、広島から隔たること五里あまり、言語も、習慣も、私たちとそう懸隔れている訳ではなかったが、それでいてこの村の魂を読みとることは、トルストイの描いた農民を理解することよりも困難ではないかと思われた。（131頁・132頁・傍点引用者・以下同）

素朴な実感と言えはそれまでだが、流入してきた「罹災者」であり、その上（居候）という立場で、「H町の長兄」からは「一体、どうするつもりなのか」としばしば問われ、空腹と体調不良とに悩まされている状態にある、「街で育った私」は、対人関係が拙いことも相俟って、違和感と孤立感を募らせる中で、こうした差別的な眼差しで「村人」／「村」を捉えてしまうのかも知れない。あるいは、知的な矜持と負の連鎖が「村人」／「村」に対するこのような偏見を抱かせたのであるうか。「村」内で、家族以外でまともな会話がどうにか成立するのは、「私」が「唯一のたよりとし、何彼と御世話にばかりなっていた」という「深井氏」だけであるようだ。それは、この「深井氏」も一年前に「村」に引越してきたばかりの、いわゆる新参者であり、「その村の人々」に対するものは異なる眼差しを「私」が「深井氏」に向けていたからかも知れない。

ところで、「小さな村」の一九四五年の出来事を語る部分には、戦時下／敗戦直後の社会状況についての具体的な言説がほとんど見られない。例えば、終戦／敗戦という重大な事態についても、直接言及することなく、「玩具の配給」の中で、軍刀を閃かしながら

「万歳！ 万歳！」と叫ぶ錯乱した男の話（この人物がなぜ凶行に及んだのかについては示されていない）として次のように記されている。

朦朧とした眼つきの男は、振り上げた軍刀で牛の尻にぴたと敲きつけると、つづいて爺さんの肘のところを払った。そしてそれきり相手の将校は黙々と立去ったのである。――八月十五日の晩の出来事で、軍刀の裏側でやられた肘の傷を撫でながら、爺さんは翌朝おそろしそくにこの話をした。（126頁）

このように当該の日付のみを記し、当然ありえたはずの感慨については全く語られていない。これは、「私」という人物が、八幡村という同じ場所で終戦／敗戦という事態に直面したことを冒頭部で描いた「廃墟から」（一九四七年一月『三田文学』）に詳述されていることとも関わっている。『小さな村』と「廃墟から」とは、発表時期から鑑みて、一九四七年のほぼ同じ時期に執筆されていたと考えられる。

「廃墟から」では、まず「私」が八幡村への移動して以降、八月一五日の「ラジオ」放送直後までのことが中心に語られている。「八幡村へ移った当初、私はまだ元気で、負傷者を車に乗せて病院へ連れて行ったり、配給ものを受取に出歩いたり、廿日市町の長兄と連絡をとったりしていた。そこは農家の離れを次兄が借りたのだったが、私と妹とは避難先からつい皆と一緒に転がり込んだ形であった」（34頁）という言葉から物語は始まる。「まだ元気」という物言いが、その後の「私」の状態を推測させる。そうさせてしまったものが「その土地」での「悲惨な生活」であったことは言うまでもないが、物語ではその衰弱していく過程が八幡村に関わって語られていく。「私」が身を寄せる「そこ」＝「農家の離れ」とは、次兄の嫂の口癖である「もう少し早く疎開していたら荷物だつて焼くのではなかったのに」（53～54頁）が示すように、本来は次兄が空襲を警戒して疎開先として予め借りる約束していた所であり、そこに住まうはずではなかった「私」が突然の事態が出来たために「つい皆と一緒に転がり込んだ形」で同居することになってしまった、という所なのである。「悲惨な生活」という認識には、こうした不安定な身の置き所ということも影響しているよう。なお、「八幡村へ移った当初」は「空襲警報も頻頻と出たし、頭上をゆく爆音もしていた」（35頁）とあるが、実際に、当該地域において八月八日から八月一四日までの七日間に空襲警報は五回発令されていたという⁽⁹⁾。

さて、八月一五日の終戦／敗戦という事態については次のように述べられている。

台所にいた妹が戻って来た私の姿を見ると、／「さつきから『君が代』がしているのだが、どうしたのかしら」と不思議そうに訊ねるのであった。私ははっとして、母屋の方のラジオの側へつかつかと近づいて行った。放送の声は明確にはききとれなかったが、休戦という言葉はもう疑えなかった。私はじっとしてられない衝動のまま、再び外へ出て、病院の方へ出掛けた。病院の玄関先には次兄がまだ呆然と待たされていた。私はその姿を見ると、／「惜しかったね、戦争は終わったのに……」と声をかけた。もう少し早く戦争が終ってくれたら——この言葉は、その後みんなで繰返された。彼は末の息子を喪っていたし、ここへ疎開するつもりで準備していた荷物もすっかり焼かれていたのだった。(35～36頁)

「もう少し早く戦争が終ってくれたら」という言葉は、当時、戦争で被害を蒙った多くの人々の嘆声ではあったが、直前の八月六日に原子爆弾で被災した広島市民にとっては、取り分け重い実感の籠った言葉となったはずである。ところで、「廃墟から」という物語は、基本的には時の流れに即して順に語られている。ただし、所々に、「私」が物語を語っている今の時点までに取得した情報が、明示的、ないし、それという指示もなく織り込まれている。例えば、ここで引用した「この言葉は、その後みんなで繰り返された」という表現は明示的なものであり、これと類似表現は物語に頻出する。一方、同じ八月一五日の夕刻、「私」が抱いた感想のように語られる「この静かな眺めにひきかえて、あの焼跡は一体いまどうなっているのだらう。新聞によれば、七十五年間は市の中央には居住できないと報じているし」(36頁)という文言があるが、アメリカの放送の紹介という形で、例えば『朝日新聞』がいわゆる「七十五年」説を報じたのは一九四五年八月二五日の紙面であり、また、『中国新聞』では、同年八月二七日の報道が最初である。ただし、この記事では「七十年」説となっており、同紙で「七十五年説」が報じられるのは同年九月五日のコラム「百人一心・広島を見捨てるな」⁽⁹⁾、および、九月一〇日の報道記事「嘘だ、七十五年説」である(広島市中央図書館蔵『中国新聞』マイクロフィルムより)。これは、後に「私」が見聞いた情報を物語に意識的に添えたとも、物語を語る「今」の「私」の記憶が錯綜していたともとれよう。

以上のように「小さな村」で語られている一九四五年度の現実は、「廃墟から」の具象的な描写とは異なり、あくまでも「私」の意識の中で閉塞された空間として映る八幡村という場所で「私」が見聞いた事象が冷ややかに語られ、心身ともに疲弊した「私」の途方に暮れた思いへと収斂していくのである。

(3)「小さな村」における一九四六年と「今」——「後記」の記述の重さを支えるもの

先に触れたように「小さな村」では、最後の三編、「②路」・「深井氏」・「③路」が一九四六年の事象である。「年が明けて」一九四六年になっても「飢えと寒さ」に苛まれる日々が続いたこと(②路)、「罹災以来、私と一緒に次兄の許で厄介になっていた妹」は他所へと移り「次兄の息子たちが、学童疎開から戻って来た」こともあってここに居続けることもできなくなり(雲)、やがて上京するところが決まり、世話になった「深井氏」への謝辞を述べ(深井氏)、「これでいよいよ、お別れだとおもいながら」その「路」を「とつと歩いて行った」ことが語られる。その上で、上京後の実態と「田舎の路」に象徴される情景と、「今」の感想で結ばれている。

ところで、一九四六年になり、「私」の社会への関わり方にわずかながら変化が生ずるようになる。

降りしきる雪が、山のかなたの空を黒く鎖ざしていたが、海の方の空はほの明るかった。私はその雪に誘われてか、その雪に追いまくられてか、とにかく、またいつもの路まで来ていた。／年が明けても、飢えと寒さに変りはなく、たまたま読んだアンデルセンの童話も、凍死しかかる昆虫の話であった。どこかへ、私も脱出しなければ、もう死の足音が近づいて来るような気がした。広島の廃墟をうろつく餓死直前の乞食も眼に泌みついていたが、先日この村をとほと夏シャツのまま歩いてきた若い男の姿——その汚れた襯衣や黝ずんだ皮膚は、まだ原子爆弾直後の異臭が泌み着いているかのようにおもえた。——も忘れられなかった。新聞に載った大臣の談話によると、この冬は、一千万人の人間が餓死する、というではないか。その一千万人のなかには、私めたいか這入っているに違いない。／私は降りしきる雪のなかを何か叫びながら歩いてゆくような気持だった。早くこの村を脱出しなければ……。だが、汽車はまだ制限されているし、東京都への転入は既に禁止となった。それに、この附近の駅では、夜毎、集団強盗が現れて貨物を攫って行くという、——いずこを向いても路は暗くどざざされているのであった。(②路・139～140頁)

「新聞に載った大臣の談話によると、この冬は一千万人の人間が餓死する、というではないか」と「私」は語っているが、例えば、一九四五年一〇月一七日付の「朝日新聞」には、見出しに「現状の儘行けば来年の死者千萬／食糧等二千萬噸必要／米記者に蔵相語る」と掲げ、記事中に「澁澤蔵相は十五日UP記者に次の如く語つたと『星條旗』紙は伝へてゐる／日本は現状のまゝ、行けば來年度

において餓死、病氣などで死亡する者約一千万を出さねばならないのではないかと思ふ、それは食糧難、住宅難、病院医療施設の不足から来るもので、過去十年以上に亘つた戦争の結果国力は消耗しつくしたのである」とある。また、「東京都への転入は既に禁止となった」とあるのは、一九四六年三月九日に公布された「都会地転入緊急措置令」を指している。

次第に社会の現実と向き合わざるを得なくなった「私」の様子が垣間見える。身を寄せていた環境に厳しさが増したことに加え、「小さな村」から抜け出し「大きな街」へと身を置くという切実な願望も容易には実現しない社会状況なのである。

「小さな村」の最後に置かれている「③路」は次のような記述から始まる。

うららかな陽光が一杯ふり灑いでいた。私はその村はずれまで来ると、これでいよいよ、お別れだとおもいながらも、後を振り返っては見なかった。向には橋が見え、日町へ出る小川がつづいている。私はその路を、その時とつと歩いて行つたのだつた。
／東京へ移つて来た私は、その後、たちまち多くの幻滅を味つた。上京さえすれば、と一閃に思い込んでいたわけでもないが、私を待伏せていた都会は、やはり、飢えと業苦の修羅でしかなかった。／どうかすると、私は、まだあの路を歩いている時の気が、魅つてくる。(141～142頁)

「あの路を歩いている時の気持」とあるが、ここでは「小さな村」から「大きな街」への「脱出」がどうにか叶つたことで、心ここに非ずの状態となり、背後の「村」の景に眼を向けることなく、ひたすら歩だけを前に進めようとする状態を指している。しかしながら、「私」が「今」いる場所、来ることを切望していた場所の実情も「飢えと業苦の修羅」であるという事態に直面してしまう。すると、「私」の心に深く刻まれている、「罹災以来、何度ゆきき」したか分からない「あの路」に付随して抱く否定的な思いが浮上してくるのである。「あの路の景色は、いまままざと眼の前に浮かび、あそこを歩いた時のひだるい気持も、まだ消え失せてはいない」・「空腹のあまり私はとかく長兄の許へよく出掛けて行くのであつた。だが、そこで腹を拵えたとしても帰りにまた一里半の道が控えていた。ことに夜など、川に沿って戻る路が、――それは人生のように侘しかった」(①路137～138頁)とあり、前に引用した「③路」にも「私はその雪に誘われてか、その雪に追いまくられてか、とにかく、またいつもの路まで来ていた。(中略) いずこを向いても路は暗くとざされているのであつた」とある。そのうえで「③路」は、すなわち「小さな村」という小説は、「日々の糧

に脅かされながら、今も私はほとほとあの田舎の路を憶い出すのだ。ひだるい足どりで歩いて歩いて行つた路は、まだはるか私の行手にある」(143頁)という言葉で結ばれている。「私」の「人生」とも重なり得る「路」とは、〈小さな村〉にいた時分も〈大きな街〉へと脱出した「今」も「ひだるい」(＝空腹と疲労で、だるく力が入らない)という言葉に表象されているのである。「飢ゑと業苦の修羅」のありようを、日録風・箴言風・散文詩的な表現を用いた一五の掌編で構成されている「小さな村」は、まさに滅びの光を宿した小品といえよう。

その光は『小説集 夏の花』の「後記」にも確かに照射されている。「この書は稀有な体験の記念である。罹災直後、ひどい衰弱と飢餓の中で私はまず『夏の花』を書いたが、『廃墟から』はその翌年ひだるい軀を石油箱の机に鞭打ちながら書いた。その他の四篇も上京後、赤貧と窮死に追詰めながら仕上げた」という文言は、「小さな村」における「飢ゑと業苦の修羅」と照らし合わせると、一九四五年から一九四八年にかけての原民喜の生活の実相をいみじくも物語っており、決して過言でもなければ誇張したものでもないことが解る。要するに、虚構としての「小さな村」における嘆声は、「後記」における原民喜の述懐に確かな現実性を与えているのである。

(1) 本稿における原民喜の書簡については『定本原民喜全集Ⅲ』(一九七八年・青土社)に拠っている。また、小説「小さな村」・「廃墟から」・「氷花」の引用本文については、岩波文庫版『小説集 夏の花』(一九八八年)に拠っており、附記してある頁番号は同書のものである。

(2) 『五日市町誌・下巻』(一九八三年・五日市町誌編集委員会、295頁。なお、現在、当該場所(広島市佐伯区八幡三十四)では、田尾米穀店が営業しており、「離れは取り壊され、庭として茶室風の待合室」となっているという(佐伯区ふるさと文庫・やした歴史散策地図・二〇〇四年・広島市佐伯区役所)。また、河浜一也の『佐伯区本』(二〇一七年・溪水社)には、「八幡本通り」と呼ばれた当時の旧県道」は、現在『ふれあい通り』と呼ばれ、少し疎らにはなつたが、現在でも商店街を形成している。その一角にある田尾米穀店は、そのほぼ中央よりやや北側に位置し、昭和初期からその北にある郡橋を中心に発達した商店街の中にあつた。戦後すぐの時期には、近くの八幡川で水浴びをする原民喜の姿が見られたという(同書88～89頁)とある。

(3) 「八幡村役場文書・統計・人口調査 昭和一九～二〇年」(広島市公文書館蔵)による。

(4) 『五日市町誌・中巻』(一九七九年・五日市町誌編集委員会、246頁。なお、引用文中にある「八幡村誌」という文書は、『五日市町誌』においてしばしば引用されているが、広島市公文書館の説明によれば、現在は散逸してしまっているとのこと、広島市公文書館にも、一九四〇年版と推定される、村の行事や事務事項が日誌のような体裁で記述されている文書の写しが存在するだけである。

(5) 『広島県戦災史』(一九八八年・広島県)、278～287頁。

(6) 『広島原爆被災誌・第四巻』(一九七一年・広島市役所)、728頁。並びに「八幡村役場文書・兵事・罹災者收容名簿 昭和二〇年」(広島市公文書館蔵)も参照した。

(7) (3) に同じ。なお「八幡村役場文書・統計・昭和二二年度人口調査」(広島市公文書館蔵)によれば、一九四六年度には村の人口は二九〇二人に減少している。

(8) (2) に同じ。140頁。

(9) (5) に同じ。441・449頁。なお、「小さな村」に出てくる「松根油」については、『五日市町誌・中巻』において、当該地域でも「松根油・松脂油の採取」が「課せられた仕事」であり、「松根油、松脂油は航空機燃料代用にする」と称して、各町村へその供出が強制された」とあり(同書334頁、「農会」(125・126頁)については、「八幡村農会」設立の経緯、改組・統合の歴史、業務内容などが詳述されている(同書138・139頁)。また、「颱風」(134頁)とあるが、これは、一九四五年九月一七日に鹿児島県枕崎付近に上陸し、九州を縦断して、広島から松江へと進んで、取り分け広島県に甚大な被害をもたらした超大型の台風、枕崎台風を指している。広島県内においては、特に水害が激甚であって、全国の半数を占める惨状を呈し、死者二二九人・行方不明七八三人・橋梁流失一〇九六箇所・堤防決潰一二五二箇所に及んだ(『広島県戦災史』・524頁)。この台風により、八幡村近辺でも九月一九日から二〇日にかけて、佐方・野登呂地区において、山津波が発生して、大きな被害が出たという(『五日市町誌・下巻』・155頁)。

(10) 小田切秀雄監修『新聞資料原爆』(日本図書センター・一九八七年)、18頁。なお、『新修広島市史・第二巻』(広島市役所・一九五八年)では、「広島市の七五年間不毛説が新聞紙上に現れた」例として「八月二十四付の『毎日新聞』に米国側の発表として『広島・長崎は、今後七十余年間に草木は勿論、一切の生物の生息不可能である』と報道された」(749頁)と紹介されている。また、この「七十五年」説の出所については『広島市被爆70年史』(広島市役所・二〇一八年)に「いわゆる『70年生物不毛説』は、原爆開発計画に携わった科学者ハロルド・ジェイコブソンの発言に始まる。『放射能は70年間は消散しない。広島は75年の間、荒廃の地となるだろう』。NS通信がトルーマン声明の翌7日にニューヨーク発で報じた」とある(同書242頁)。

二 「氷花」における疲弊の中の幽き希望

(1) 「新しい人間」を求めて——一九四六年の東京の「彼」

「氷花」という物語は、「小さな村」にあった「私を待伏せていた都会は、やはり、飢えと業苦の修羅でしかなかった」という文言を、いわば別の仮構的小宇宙として具象化したものである。

物語の視点人物である「彼」の「今」の状況は、「三畳足らずの板敷の部屋」で「突然、木端微塵に飛散るものの幻影」に怯え、リルケの「マルテの手記」にある「僕をいれてくれる屋根はどこにもない、雨は容赦なく僕の眼にしみるのだ」という言葉を実感しながら「よく街を出歩いた」という。そこで眼にした光景には、我が身と重なるものがあつた。

有楽町駅のコンクリートの上に寝そべっている女を見かけたことがある。乳飲児を抱えて、筵も何もない処で臆びれもせず虚空な眸を見ひらいていた。それは少し前まで普通な暮しをしていたことの分る顔だった。そういう顔が何といつても一番いけなかった。朝、目が覚めると、彼の部屋の固い寢床は、そのまま放心状態で寝そべっているコンクリートになっている。はつとして彼は自分にむかつて叫ぶのであつた。／「此処で死んではならない、今は、まだ死んではならないぞ」(170頁)

「今」の「彼」は、極めて疲弊した状態にありつつも、これから何か為すべきことがある、という意思が存在していることを示している。そうした折「家の焼跡に建てているバラックももう殆ど落成しそうだ――。／広島からそんな便りを受取ると、彼は一度郷里へ行ってみたくなった」(170頁)という。そこから物語は、「今年の二月」(170頁)に八幡村から広島の実家の焼跡へ庭に埋めておいた物品を掘出しに行ったことを始めとして、一九四六年の出来事が、ほぼ時系列に即して、まず回想されていく。ここで指摘しておく必要があるのは、「彼」が倉敷経由で広島に帰省したところの「今日はもう大晦日(191頁)」という場面に次いで「翌朝、彼は原子爆弾に逢う前訪ねて以来、まだその後一度も行ったことのない妻の墓を訪れようと思つて外に出た」(191頁)とあり、ここからは一九四七年の出来事が語られているのである。物語の「今」は明らかに一九四七年(以降)ということであり、「今年の」という記述は、(語り手)の次元を超えた作者段階の過誤である。⁽¹⁾

「罹災以来、八幡村で次兄の家に厄介になつていて、飢えに苛まれ、衰弱してゆく体を視つめながら、漠然と何かを待つていた」状態にある「彼」の許へ、「東京の友」から「新シイ人間ガ生レツツアル ソレヲ見ルノハ嫌シイ 早クヤツテキタマエ」という便りが届き、それに相応じるように「新しい人間が見たいという熱望は彼にもあつた。彼がああ原子爆弾で受けた感動は、人間に対する新しい憐憫と興味といつていい位だった。急に貪婪の眼が開かれ、彼は廢墟のなかを歩く人間をよく視詰めた」(171～172頁)という。「原子爆弾で受けた感動」・「人間に対する新しい憐憫と興味」とは、原子爆弾がもたらした惨禍を目の当たりにしたことにより、人間とい

うものに対する見方・考え方が、今までとは異なるようになった、あるいは今までにはなかった評価軸・視角をもたらし、視線のありようにも変化が生じた、ということを示している。そこから「貪婪の眼が開かれ」たのである。この点が「今はまだ死んではならない」という思いにつながり、今までとは違った人間観察に基づく創作活動への意欲に結びついている。これこそが〈これから何か為すべきこと〉なのである。

「六大都市転入禁止」（一九四六年三月）や「モラトリウム」（一九四六年八月）などを乗り越えて、ようやく東京に辿り着いた「彼」が、「省線」の窓越しに眼にしたのは「焼けているとはいっても、広島の荒廃とはちがっている」（176頁）光景であった。後に「焼跡と焼けていないところが頻りに彼の興味を惹いていたが、O先生の宅も無事に残っている一郭にあった」（177頁）とあり、原子爆弾により市内の大半が壊滅的被害を被った「広島の廃墟」（小さな村・139頁）と、どうしても比較・対照化してしまうのである。

三田の学校の夜間部に就職できたものの、相変わらず飢えに苛まれる過酷な日々を送っていた「彼」は、虚構に基づいて自己を定立しようとする。

ふと、彼はその頃読んだセルバンテスの短篇から思いついて、「新びいどろ学士」という小説を書く、こう考えた。セルバンテスの「びいどろ学士」は自分の全身が硝子でできていると思いついて、他からその体に触られることを何よりも恐れている。そのかわり、彼の体を構成している、その精巧微妙な物質のお蔭で、彼の精神は的確敏捷に働き、誰の質問に対しても驚くべき才智の閃きを示して即答できるのであった。（中略）「おお、首府よ、お前は無謀な乱暴者の希望は伸すくせに、臆病な有徳の士の希望を断つのか！ 無恥な賭博者どもをゆたかに養うのに、恥を知る真面目な人々を餓死させて顧みないのか！」／彼はこの歎声がひどく気に入ったので、こういう人間を現在の東京へ連れて来たら、どういうことになるのだらうかと想像しだした。その新びいどろ学士は、原子爆弾の衝撃から生れたことにしてもいい。全身硝子でできている男を想像しながら、彼が電車の中で人間攻めに遭っている、扉のところの硝子が滅茶苦茶に壊れているのが目につく。忽ち新びいどろ学士の興奮状態が描かれるのであった。（180～181頁）

その後、「彼」は自己内他者としての「新びいどろ学士」との応答を試みたり、「彼」自身を「新びいどろ学士」と重ね合わせたり

するものの、日常生活を送るに当たっては、はかばかしは「機能」しなかったことが語られている。ただし、「新しい」眼差しだけでは経験することができたはずである。なお、この小説の表題である「氷花」は、「全身が硝子でできている男」という形状のイメージが、「氷が花のように結晶したもの」・「樹木や枯れ草などに水分が凍りついて白い花をつけたようになる現象」（『日本国語大辞典』）としての氷花^{ひょうか}のありようと重なることから命名されたものであろう¹³。

では、東京で「彼」が「熱望」した「新しい人間」との出会いはいったいどのようなものであろうか。また、「彼」にとって「新しい人間」とはどのような存在なのであろうか。

まず、「彼」から見て、戦争による痛手を一九四六年の今もなお被り続け、生きていくことが困難な状況にある社会的弱者がいた。こうした人々は、東京においては、前に触れた「有楽町駅のコンクリートの上に寝そべっている女」や「電車が発着するすれすれのところに、片足は靴で片足は草履で、十歳位の蓬髪の子供がぼんやり腰を下ろして蹲っている」（186頁）というお茶の水駅のホームで眼にした浮浪児、上野博物館で見かけた「石段のところに、赤ん坊を抱えた女がごろんと横臥している」（188頁）姿として語られている。ただし、既に広島にても「餓死直前の乞食も眼に泌みついていた」（『小さな村』139頁）ところの人々である。これらの人々は、「彼」にとっては同情を寄せる対象であり、「彼」のいう「新しい人間」の範疇には当然入らない。また、「彼」として違和感／不快感を催す外見を有する人間、軽佻浮薄と映る人間については、広島において「足首のところを絞るようになっていた軍のズボンを穿いている男たち」（『小さな村』142頁）・「急に濃厚な化粧をして無智の衣裳をひけらかしている女」（同・143頁）や、「頭髮をてらてら光らし派手なマフラを纏っている青年や、安っぽい衣裳の女」（172頁）として眼についていたが、東京ではそうした人間はありふれていた為か言及がない。戦後、変わり身早く狡猾に世渡りをして、「彼」として不快な言動をなす人間についても同様である。すでに広島においても、物々交換について得意げに語る「獲物の血を啜っている蜘蛛の姿を連想さす」「漁師らしい男」（172頁）や、悪事をなして金儲けの自慢をする「赤ら顔のむかつくような表情の男」（174頁）などに接していた。いずれにせよそのような人物は、戦後の、混乱して無秩序な社会状況に乗じた存在であり、「彼」の求めていた「新しい人間」ではない。

しかしながら、一九四六年の東京で「彼」が遭遇した人間の中には、肯定的な意味で興味・関心を誘う存在、目新しさを覚えるような存在もあった。例えば、一九四六年の四月の出来事として、目白からの帰途、混雑する電車内において「ふと、すぐ側にいるジャンパーの男が、滑らかな口調で、乗りものの混乱を罵倒しだした。彼は珍しげに眺めた。その男の顔は敗戦の陽気さを湛へてい

て、人間と人間とが滅茶苦茶に摩擦し合う映画のなかの俳優か何かのようにおもえた」(17頁)ということがあり、大森駅から省線に乗った際には、「次の駅でどこかとプラッカードを抱えた一群が乗込んで来ると、車内は異様な空気に満たされた。『三菱の婿、幣原を倒せ』そんな文字の読みとられるプラッカードは電車の天井の方へ捧げられ、窓から吹込む風にハタハタと翻っている。背広を着た若い男が小さな紙片を覗き込みながら、インターナショナルを歌っている。爽やかな風が絶えず窓から吹込み、電車は快適な速度に乗っていた。新しい人間はあんなににいるのだらうか……彼も何となしに晴々とした気持にされそうであった」(178頁)ということもあった。アジア太平洋戦争に対して否定的に受け止めていた「彼」、原子爆弾により直接被害を蒙った「彼」においては、「敗戦の陽気さ」は好ましいことと感じられ、活性化した社会運動には共感を覚えたに違いない。ただし、「新しい人間はあんなににいるのだらうか……」とあり、「彼」が求めていた「新しい」存在であるかは留保しているのである。物語では、それ以外にも、四月に知人を訪ねて行った「文化学院」の催しで遭遇した奇矯とも言える人々(182頁183頁)や、初夏に病院で出会った人物(184頁185頁)などが出てくるが、「新しい人間」の眼差しを合わせもってしても、「新しい人間」としては語られていない。

(2) 「新しい人間」との遭遇——連なりゆく想念

一九四六年の一二月のある日の「彼」は次のように描写されている。

それはもう霜を含んだ空気がすぐ枕頭の窓硝子に迫っていたからであろうか、朝の固い寢床で、彼は何か心をかきむしられる郷愁につき落されていた。人の世を離れたところにある、高原の澄みきった空や、その空に見える雪の峰が頻りと想像されるのだった。すると、昔みたセガントイの絵がふと思い出された。あの絵ならたしか倉敷に行けば見られるはずだった。ふと、彼は倉敷の妹のことも思い浮べると、無性にそこへ行つてみたくなつた。その一家だけが、彼の身内では運よく罹災を免がれているのだった。広島からの便りでは、焼跡に建てたバラックは、まだ建具が整わず、そこで棲めるようになるのは年末頃だろう、
といつて来た。彼もその頃、旅に出掛けたいと思ひだした。(188頁189頁)

ここで言う「郷愁」とは、「人の世を離れたところにある、高原の澄みきった空や、その空に見える雪の峰が頻りと想像される」とあることから、他郷にある人が故郷をなつかしく感じる気持というよりは、過去の何かを懐かしむという気持に近いものである。そこから想起されたのが「昔みたセガンティニの絵」であり、その絵がある「倉敷」であり、さらに、その地にいる「妹」の「一家」へと「彼」の思いは展開していく。

なお、原民喜には「アルプスの真昼」と題する随想がある（青土社刊『定本原民喜全集Ⅱ』所収・同書554～555頁。初出誌については「未詳」とある）。「まへから一つの郷愁に似たものがあつて、精神を酷使した後や、激しい不安の中で、それは峻い雪の峰の姿をとつてゐたが、堀辰雄小品集『絵はがき』を読んで、私は急にセガンティニの絵が見たくなつた。ずっと昔に見たあの絵はもうすっかり輪郭も忘れてはゐたが、郷愁に似たものだけが残つてゐた」（傍点引用者）という書き出しで始まり、「絵はがき」の一節の引用に続き、「かういふ文章を読むにつけ、郷愁はいよく切実になつてゐた。私は年末の殺人列車に身を投じると、とうとう倉敷に赴いたのであつた。／大原コレクションの二階はひっそりとしてゐた。天窓から射して来る光線が、外側の雲の加減で絶えず変化してゐたが、それがまた眼の前にある『アルプスの真昼』の画面に鋭く反映するので、私は羊飼の婦人とともにぎりぎりの針のやうなものを感じてゐた」とある。随想「アルプスの真昼」においても、「氷花」と同じく「郷愁」——「峻い雪の峰の姿」——「セガンティニの絵」という展開が見られるのである¹³。

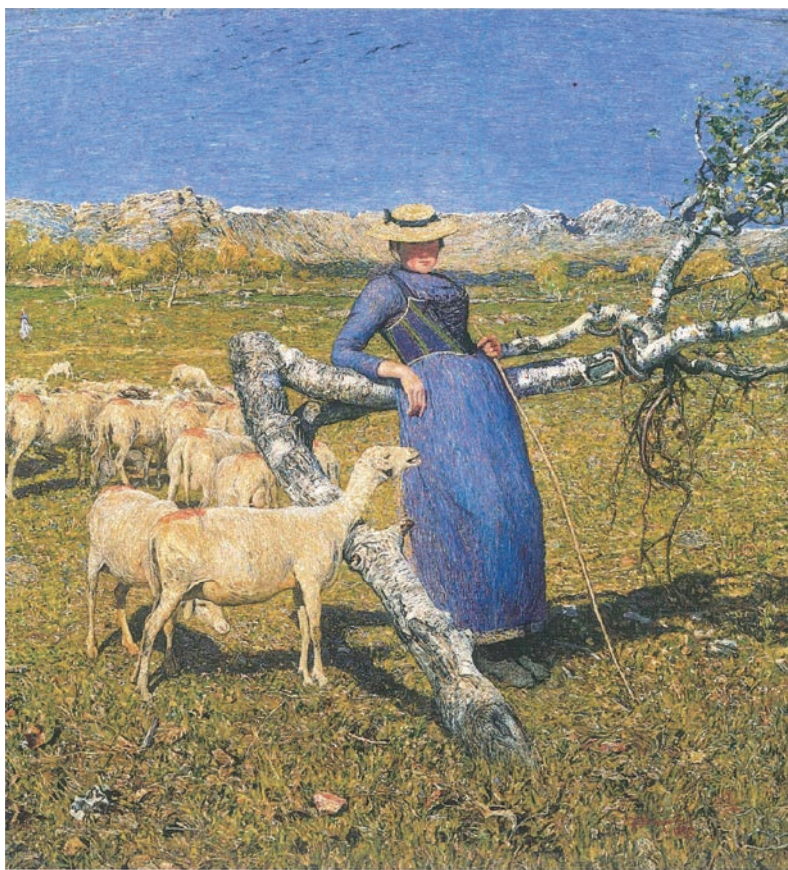
ところで、「昔みたセガンティニの絵」とあるが、「セガンティニ」≡ジョヴァンニ・セガンティーニ（一八五八～一八九九）はイタリアの画家で、アルプスの風景などを題材とした絵画を残し、アルプスの画家として知られている。「氷花」においても、一月三〇日に相当する記述に「翌日、彼が大原コレクションを見て」（190頁）とあり、「セガンティニの絵」とは「倉敷を基盤に幅広く活躍した事業家大原孫三郎が、前年死去した画家児島虎次郎を記念して昭和5年に設立した、日本最初の西洋美術中心の私立美術館¹⁴」である、広島県倉敷市にある大原美術館において、現在も所蔵・展示されている「アルプスの真昼」という作品である。大原美術館のHPでは、セガンティーニの「アルプスの真昼」（一八九二年 油彩 画布 86×80 cm）について次のように紹介されている。

澄んだ高原の空気のなかで、まばゆいほどに輝く太陽の光をいっぱいを受けたのどかな放牧の風景が描かれている。いかにも山国スイスらしい平和で明るい真昼時である。その明るい印象を強調するため、黄と青と白を中心とした澄んだ色彩が、こまか

いタッチで画面を埋めている。そこには、明らかにスーラやシニャックの新印象主義の影響が見てとれるであろう。特に、葉を一本一本描いたかと思われるような草原の描写は、地平線がかなり高くとつてあるだけに画面の大部分を占めていて、溢れるような金色の光を感じさせる。セガンティーニがよく知っていたイタリアに近いアルプス高原の情景が、爽やかな大気の香りとともに、見事に再現されているのである。(↓図版参照)

久保州子によれば、セガンティーニの「アルプスの真昼」と題する絵は二種類あり、第一ヴァージョン(セガンティーニ美術館所蔵・一八九一制作・最初の表題「風の吹く日」・第六回国際芸術展で金賞を受賞)は、「羊飼い」が「太陽の光を追い続ける」という構図の絵で、それと対照的に、大原美術館が所蔵する第二ヴァージョンの「アルプスの真昼」は、「強い日差しを避けてうつむき加減で羊飼いが白樺の枝にもたれて一休みしている光景」が描かれていると述べている⁽¹⁵⁾。これは原画を見て気付くことであるが、この「羊飼い」の女性は、眼元に落ち着いた、大人としての雰囲気漂わせており、いわゆる若年層ではない。

なお、「氷花」の「彼」は「昔みた」としているが、「あの絵ならたしか倉敷に行けば見られるはずだった」とあることから、一九三〇年に設立された大原美術館で「アルプスの真昼」を見たのではなく(随想「アルプスの真昼」においても「ずっと昔に見たあの絵」



セガンティーニ「アルプスの真昼」(大原美術館所蔵)

とある)、大原孫三郎の意を受け、欧州で「アルプスの真昼」を始めとする美術品を購入した児島虎次郎が一九二二年八月に倉敷尋常高等小学校を会場に開催した第三回「泰西名画家作品展覧会」か、一九二七年四月に恩賜京都博物館で開催された「大原コレクション泰西名画展」か、一九二八年二、三月に東京府美術館で開催された「大原孫三郎氏蒐集泰西美術展覧会」において、⁽¹⁶⁾「彼」は「みた」ということになる。

……混濁した空気の夜が明けると、窓の外には清冽な水や青い山脈が見えていた。倉敷駅で下車すると、彼ははじめて、静かな街にやって来たような気持で、あたりの空気を貪るやうに吸った。妹の家はすぐ駅の近くにあった。彼はその家の座敷に腰を下ろすと、久振りに畳の上に坐れる自分を懐しくおもった。松の樹や苔の生えた石の見える、何でもない、ささやかな庭も彼の眼には珍しかったが、長らく見なかったうちに、姪たちはすすくと伸びているのだった。まだ国民学校の三年だというのに、木綿緋のずばんを穿いている背の高い姪は女学生のように可憐だった。／「諸人　こぞりて　讃へまつれ　久しく待ちにし……」と、その姪は幼稚園へ行っている妹と一緒に縁側で歌った。／「誰にそんな歌教えてもらった」と彼はたずねてみた。／「お母さんよ、この、ひさあしいく……というところがとてもいいわね」／翌日、彼が大原コレクションを見て、家に戻って来ると、小さな姪が配給で貰った五つの飴玉のその一つを差出して、／「おじさん、あげましょう」という。「ありがとう、おじさんはいから、あなた食べなさい」／そういうと、この小さな児は円い眼を大きく見ひらいて何だか不満そうな顔だった。／「配給を分けてあげたい折角の心づくしだから、もらっておきなさい」と妹は側から彼に口を添えた。(189～191頁)

今回の「旅」で「彼」の求めていたものの一つが、「セガンティニの絵」を再び見ることであったはずなのであるが、絵に対する「彼」の感想は語られず、「彼が大原コレクションを見て、家に戻って来る」という事実だけが淡々と示される。その言葉を挟むようにして語られているのは、「ふと、彼は倉敷の妹のことも思い浮べると、無性にそこへ行ってみたくなくなった」という、もう一つの目的が具現化した事象である。その地では「清冽な水や青い山脈」を背景に、「彼」が久しく身を置くことのなかった、穏やかで明るい空間における妹の娘たちとの何気ない触れ合いがあった。「彼」の心に印象深く刻まれたものは、二人の姪が歌う讃美歌であり、「小さな姪」が差し出す「心づくし」の飴玉であった。この間、殺伐とした人間関係の中で生きてきた「彼」にとって、この姪たちとの

やり取りは、一入安らく潤いのある時間として感じられたはずである。敢えて明示していない「アルプスの真昼」という絵が醸し出す、明るく牧歌的な風情は、姪たちの環境とその息遣いの中に、図らずも現出している。こうしたイメージの融合も、「氷花」における「彼」の連想の一端を示している。

一九四六年一月二月の大晦日、倉敷を立ち、夕刻に広島に到着し、徐々に復興しつつある街並み眺めつつ、建てたばかりの「長兄」の「こじんまりした家」を訪れ、雑然と荷物が取り散らかされている中に「立働いている甥たちの姿」を認める（190頁）。「翌朝」、即ち一九四七年一月一日の朝、「原子爆弾に逢う前訪ねて以来、まだその後一度も行ったことのない妻の墓を訪れ」（191頁）、その後、「次兄」の建てたバラック訪ねる。そこでは「汚れた簡単服を着た痩せ細った小さな姪や、黝ずんだ顔の甥たちがゴソゴソして」おり、「賽れ顔の次兄は置炬燵の上に顔を乗せ、『ここでは正月もへちまもないさ』と呟いてい」て、「彼」も「ここでは、彼にも罹災当時の惨澹とした印象が甦りそう」（192頁）になってしまっているのである。次いで「川口町の姉」を訪ねた折には、「長兄」や「次兄」の奮闘ぶりを聞かされ、「彼が東京で、まだ落着く所も定まらず、ふらふらと途方に暮れているうちに、兄たちは、とにかく、その家族まで容れることのできる家を建てたのであった」（193頁）というように彼我の生活力の差異を実感させられてしまうのである。それから「彼」が「長兄」の家に「二、三日滞在していた」際に、どのような思いを抱いたのかについて明示されていないが、今回の「旅」に関する最後の記述は、その思いを象徴的に物語っている。

家のまわりの荒地は耕されて、菜園となっていたが、庭のあとの池はまだそのまま残っていた。土蔵のあった場所は石で囲まれて、一段と高くなっていたが、そこも畑にされていた。昔、彼が二階の窓から、樹木や家屋の混り合った向うに眺めていた山が、今は何の遮るものもなく、あからさまに見渡せた。長兄は物置の方の荷を整理したり、何か用事を見つけないが、絶えず働いていた。（193～194頁）

かつての実家の佇まいは消滅しているが、その場で「長兄」は新たな生活を立ち上げて奮闘している。しかし、「今」の「彼」の心を動かすものは「何の遮るものもなく、あからさまに見渡せた」遠くの「山」の姿なのである。それは、「彼」の「郷愁」としての「人の世を離れたところにある、高原の澄みきった空や、その空に見える雪の峰」とも、セガンティーニの「アルプスの真昼」に描か

れている山々とも、そして倉敷近辺の車窓から眼にした「青い山脈」とも連結している。前に引用した原民喜の随想「アルプスの真昼」にも次のような一節がある。

それから二三日の後、私は広島^の街を歩いてゐた。久振りにみるこの廢墟も、今は、粗末なマツチ箱のやうな家々が昔の道路の跡に添つて寒々^とつづいてゐる。ふと、目をやると、傾き^かゝつた陽光の中に中国山脈^の一部があざやかに輝いてゐた。と、眼は、私の眼はすぐかたはらにある墓地にも注がれてゐた。多くの墓石を背景に、くつきりと一ところ、真昼のやうに美しい姿を見せてゐる山脈^ののだつた。

ここには、「私」＝原民喜が、広島において感興を催した「山脈」の光景について語られている。恐らく「氷花」の「彼」が眼にした「山」の景も、これと同様に印象的深いものであったのではないか。

ところで、「氷花」は次のように結ばれている。

慌しい旅を畢えて、東京へ戻つて来ると、彼の部屋はしーんとして冷え返つていた。火の氣のない一冬が始まるのだつた。あんまり寒いときは彼は夜具にくるまって寝込んだ。彼は震えながら、こんどの旅のことを回想していた。どうい^うわけか倉敷の二人の姪の姿が心を温めてくれるやうであつた。／「諸人、こぞりて……」という歌が彼の耳についた。あの小さな姪たちが、素直に生長して、やがて、立派な愛人を得て、美しいクリスマス^の晩を迎えるとき、……そういう夢がふと頭をかすめるのであつた。(194頁)

「氷花」という物語には、「郷愁」から「峻しい雪の峰の姿」、さらに「セガンテイニの絵」という連想があつたことが語られ、その「アルプスの真昼」という絵の明るさは「倉敷の二人の姪」の愛くるしい様子と重なり合い、融合するとともに、そこに描かれているアルプスの遠景は、実景である広島^の山々の美しい姿の再確認へとつながつた、ということが示されている。東京へ戻つて「こんどの旅のことを回想」すると、「どうい^うわけか倉敷の二人の姪の姿が心を温めてくれるやうであつた」という。「彼」の上京の目途で

もあった「新しい人間」との出会い、一九四六年の東京ではついに叶わなかったが、図らずも、広島倉敷にいる身内である「二人の姪」に「新しい人間」の姿を認めたのであろう。つらい過去を引きずることもなく、現在の生活に右往左往することもなく、未来のありようを純直に夢想させてくれるような存在、それこそが「今」の「彼」にとつての「新しい人間」なのかも知れない。「二人の姪」の明日は、疲弊した状態にある「彼」にとつて、まさに幽けき希望なのである。

③「氷花」と題辞——『小説集 夏の花』の構成

「氷花」の末尾にある「『諸人、こぞりて……』という歌が彼の耳についた。あの小さな姪たちが、素直に生長して、やがて、立派な愛人を得て、美しいクリスマス晩を迎えるとき、……そういう夢がふと頭をかすめるのであった」という文言に見られる、ある種の宗教的雰囲気注目したい。「小さな姪たち」が口にした歌詞は、日本基督教団讃美歌委員会編『讃美歌』112番の一番「もろびとこぞりて迎えまつれ／久しく待ちにし主は来ませり／主は来ませり主は、主は来ませり」に相当する。日本のクリスマスキャロルとして馴染み深いものである。それが「彼の耳についた」、即ち、「小さな姪たち」の歌声が「彼の」耳にとどまって、いつまでも忘れられなくなってしまった、というのである。その時の「彼」の心境は、「旧約聖書」の「雅歌」の「第八章」末尾前にある「一二」なんぢ園の中に住む者よ、伴侶等なんぢの声に耳をかたむく、請ふ我にこれを聴しめよ」という一節と重なるものがあつたのではないか。それは作者である原民喜が『小説集 夏の花』の冒頭に記した題辞から類推することができる。題辞の「わが愛する者よ請ふ急ぎはしれ／香はしき山々の上にありて獐のごとく小鹿のごとくあれ」という文言は、「旧約聖書」・「雅歌」・「第八章」末尾にある「一四 わが愛する者よ、請ふ急ぎはしれ、香はしき山々の上にありて獐のごとく、小鹿のごとくあれ」を用いているのである。つまり、原民喜はその直前にある一節も当然のことながら熟知していたはずである。作者は「氷花」の末尾において、「彼の」の「今」の夢想を記すにあたり、「雅歌」・「第八章」・「一二」の言葉の世界を下敷きにしたのではないかと考えられる。

さらに、それは題辞の形成にもつながっているのである。

『小説集 夏の花』に収められた小説を发表順に並べると次の通りである。

一九四七年「夏の花」(「三田文学」六月号)

「小さな村」(「文壇」八月号)

「廃墟から」(「三田文学」十一月号)

「氷花」(「文学会議」一二月号)

一九四八年 「昔の店」(「若草」六月号)

「壊滅の序曲」(「近代文学」一月号)

それに対して『小説集 夏の花』の小説の配列は、「夏の花」―「廃墟から」―「壊滅の序曲」―「小さな村」―「昔の店」―「氷花」となっている(詩「燃エガラ」・エッセイ「戦争について」・「平和への意志」を除く)。その「後記」に「『夏の花』『廃墟から』『壊滅の序曲』の三篇は正・続・補の三部作で」とあり、三篇が始めに揃って並ぶのは――「壊滅の序曲」の発表が六篇中で最も遅い時期であったとしても――妥当な配列と言えよう。続いて「『小さな村』『昔の店』『氷花』もそれぞれ三部作とつながりあるものである」とあるが、「昔の店」と「氷花」との順については発表時期からみると逆転している。「三部作」との「つながり」ということを、素材としての広島(市・県)ないし素材としての原子爆弾による被災に関する事象の記述と捉えるならば、その描写の多寡や濃淡から鑑みて、こうした順になった、と解することもできる。また、物語における「氷花」の「今」が最も新しい時期である、という理由からかも知れない。しかしながら、「氷花」という小説を最後に置くことには、『小説集 夏の花』という書物全体の構成という点において、原民喜の意図するものがあつたのではないか。「氷花」は、二人の「小さな姪たち」の明るい未来に寄せた、「彼」の夢想／願望で結ばれている。これは、前章で触れた「小さな村」の「日々の糧に脅かされながら、今も私はほとほとあの田舎の路を憶い出すのだ。ひだるい足どりで歩いて歩いて行つた路は、まだはるか私の行手にある」という重苦しい現状認識を示す結び方とも、「昔の店」における「罹災者として、寒村の離れに託住居を続けるようになった静三は時折、ほんやりと昔の店を憶い出すのであつた」(168頁)という現在に希望を見いだせずに追憶に浸る様子を示して物語を閉じるという形とも、明らかに異質なものである。既述の通り、「氷花」という小説の一九四六年の一二月から翌年の一月にかけての「彼」の想念は、連想と融合とによって展開しており、それが「氷花」の末尾で、願いが叶うように祈るが如く、未来に開かれた形で収束していく。そこに、「アルプスの真昼」という絵の世界のイメージが重なつたものが、題辞の「わが愛する者よ請ふ急ぎはしれ／香はしき山々の上にありて獐の／ごとく小鹿のごとくあれ」なのである。『小説集 夏の花』の構成という面からみると、冒頭の題辞と小説の最後に配された「氷花」とは、結果として首尾照応しているのである。

題辞の文言を、「氷花」の「彼」に即してみると、二人の「小さな姪たち」は「わが愛する者」であり、彼らは、あたかも美しい

「山々」で躍動する生き物のように、元氣よく、幸せに生きていくことを願う存在なのである。原民喜が題辭に託したもののにも、そうした祈念は込められているはずである。ただし、『小説集 夏の花』の六篇の作品世界を総合するならば、「わが愛する者よ請ふ急ぎぎはしれ」という言葉には、原子爆弾により被災した広島の人々、特に未来を築き上げていく世代への声援の意も、むろん込められている。

(11) ここで〈誤記〉に関して触れておく。「彼」が「倉敷」に「妹の家」を訪れた場面で「諸人　こぞりて　讀えまつれ　久しく待ちにし……」と、その姪は幼稚園へ行っている妹と一緒に縁側で歌った(190頁)とあるが、讚美歌として巷間流布している歌詞は「迎えまつれ」である。むろん、「姪たち」が歌詞を誤って覚えたとも、「彼」がそのように聞いたともとれようが、これは作者段階の記憶違いと解すべきであろう。同様な例は「小さな村」にも見られる。「広島ゆきの電車は、その汽車の踏切から少し離れたR駅に停まる。その駅では、切符切のにやけ男が、いつも『君の氣持はよくわかる』と歌っていた」(142頁)とあるが、これは戦後最初の流行歌である「リングの唄」の一節「リ、ン、ゴの氣持はよくわかる」であろう。

(12) ざくろ文庫版『小説集 夏の花』(一九四九年・能楽書林)では、作品名「氷花」に振り仮名は付されておらず、岩波文庫版『小説集 夏の花』(一九八八年)においては「こおりばな」と振られている。

(13) この随想に対しては、徐京植が「毀れた言葉——原民喜『アルプスの真昼』に寄せて」(『季刊前夜』5号・二〇〇五年一〇月)という批評文において、原民喜の表現に関わる問題点について論じている。なお、随想文中に「堀辰雄小品集『絵はがき』を読んで」とあるが、同書は一九四六年六月に角川書店より出版された。

(14) 大原美術館HP「美術館の歴史」より。

(15) 久保州子『アルプスの画家セガントーニ』(二〇一九年・論創社) 98～99頁。

(16) 大原美術館HP「美術館の歴史」及び東京都美術館HP「沿革」より。

(17) 岩波文庫『文語訳旧約聖書Ⅲ諸書』(二〇一五年一〇月) 304頁。

(18) 題辭について、『ざくろ文庫』版では「わが愛する者よ請ふ急ぎぎはしれ／香はしき山々の上にありて獐の／ごとく小鹿のごとくあれ」とあるが、『岩波文庫』版では「わが愛する者よ請ふ急ぎはしれ／香はしき山々の上にありて獐の／ごとく小鹿のごとくあれ」と振り仮名が付されている。

(19) (17) に同じ。